



Title	大越(ベトナム)李朝の昇竜都城に関する文献史料の見直し
Author(s)	桃木, 至朗
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2010, 44, p. 1-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5386
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大越（ベトナム）李朝の昇竜都城に関する 文献史料の見直し

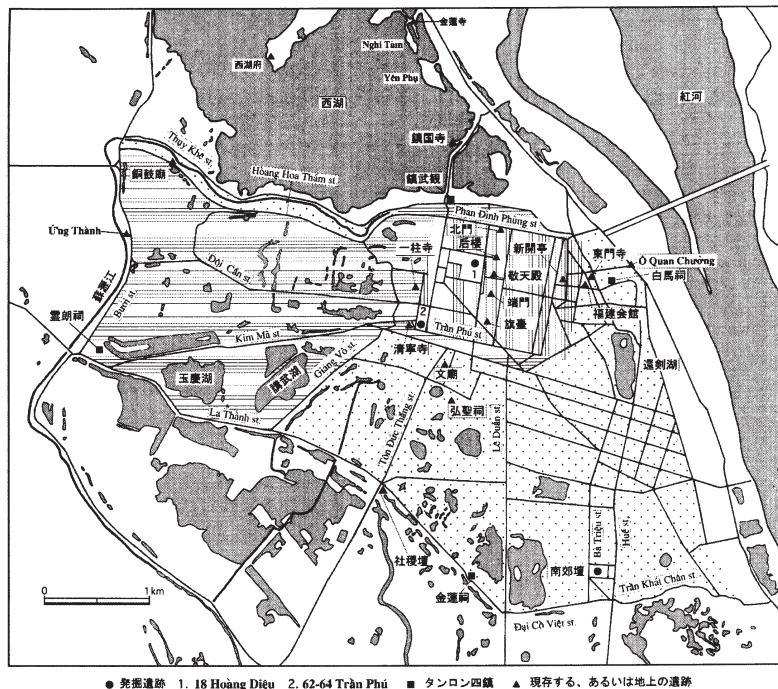
桃 木 至 朗

1. 序言

20世紀末以来、ドイモイが進むベトナムの首都ハノイの中心部では、王朝時代の都城昇竜（タンロン）の遺構がつつぎ発見されている¹⁾。とりわけ2002年に、老朽化した国会議事堂（バーディン会堂）を東側隣接地に建て替える計画にともなっておこなわれた発掘調査で、10世紀以前から19世紀までの各層を含む巨大な宮殿遺構（ホアンジエウ通り18番地遺跡）が発見されたことは、国内外の注目を集めた。2010年の建都1000年祭に向けて、考古・歴史研究者の運動により、同地点での国会議事堂建設をストップして同遺跡を保存することが決定され、さらに東側の、旗台－端門－敬天殿跡－北門と南北に遺構が連なる近世昇竜（フエに都を置いた阮朝〈1802-1945〉期は昇隆・河内）の中枢地区²⁾（図1参照）とともに、遺跡保存およびユネスコ世界文化遺産の登録申請が立案され（2010年8月に登録決定）、平城宮などの保存を実現した日本にも協力が求められた。

このために2007年に設立された「タンロン皇城遺跡の調査保存に関する日越合同専門家委員会」に、考古、建築その他の専門家に混じって、文献史学を専門とする筆者も参加を要請され、それ以来、建都をおこなった李朝（1009-1225）期を中心に、昇竜の研究を進めてきた。李朝の昇竜を扱う本稿は、その成果の一部を紹介しようとするものである³⁾。

図1：Phan Huy Lê 2006 をもとに西村昌也氏が作成した地図〔西村 2008：13〕



タンロン城範囲復元図、
 点描（京城あるいは外城域）、横線（皇城域）、縦線（禁城域）
 歴史学説（Phan Huy Le 2006）による範囲復元

表1：初期タンロン（昇竜）都城建設の諸段階

866	唐の節度使高駢が南詔に占領された安南都護府を奪回し、大羅城を建設
1009	ホアルー（華間）で李公蘊が即位、李朝樹立（～1225年）
1010	大羅城に遷都し昇竜城と改称。各宮殿の建設
1014	昇竜京四面の土城の建設
1024	昇竜京城を修治
1029	各宮殿と「竜城」の建設
1055	大内の諸殿宇を修する
1078	大羅城を修する
1203	寝殿の西への新宮の建設
1209-1216	李朝末の内乱。首都・宮殿内でも激しい戦闘
1225	陳朝樹立（～1400年）

李陳時代史の史料は乏しく、一般に研究が遅れている⁴⁾。李朝期の昇竜（主要事項は表1参照）については近年、レー・ヴァン・ラン [Lê Văn Lan 2004]、ファン・ファイ・レー [Phan Huy Lê 2006]、八尾隆生 [八尾2007] などの総括的な論述が現れたが、なお未検討の問題や整理が必要な点がある。本稿では、史料に現れる「宮」「禁」「大内」「城」「京」その他の語の再検討を手がかりに、各城壁や宮殿その他の施設の位置、首都に必要な諸機能の分布、首都の理念と諸空間の区分といった基本的問題を論じる。

2. 宮殿や諸施設の分布

周知の通り、『大越史記全書』（以下ではTTと略称⁵⁾）本紀2：李太祖順天元年（1010）秋7月条に、華閭城から「京府大羅城」への遷都、黄竜の出現にちなんだ「昇竜城」への改称、「昇竜京城」内での乾元殿以下の宮殿起造等々の記事が載る。「城」の四面には祥符、広福、大興、耀徳の4門を開いたという。翌年には、城の内外に蔵や寺観を建てた記録が残る（『大越史略』（以下SL）もほぼ同文）。また、太宗（在位1028-54）即位時の「三王の乱」ののち、TT-1029年六月条には、乾元殿の跡地に神竜が現れたのにちなみ、同地に天安殿を建てさせたほか、周辺の宮殿・竜堀〔テラス〕などを造営させたこと、それらの外側を取り囲んで一重の城壁を築き、竜城と名づけたことが記録されている（「聴政之所」天慶殿は翌年造営－SL・TT）。

細部に疑問はあるものの、中心部がおおむね下図2・3のように左右対称配置と解釈されるこれらの宮殿の記録をもとに、昇竜都城の中心部における宮殿・城壁の位置が、多くの学者によって検討されてきた。かつては李陳時代昇竜の中心はより西側に想定する説もあったが [Phan Huy Lê 2006: 5-9に紹介あり]、黎朝以降の敬天殿を中心とする南北軸が李陳時代に遡ると見なされるようになり（注2参照）、ホアンジェウ通り18番地遺

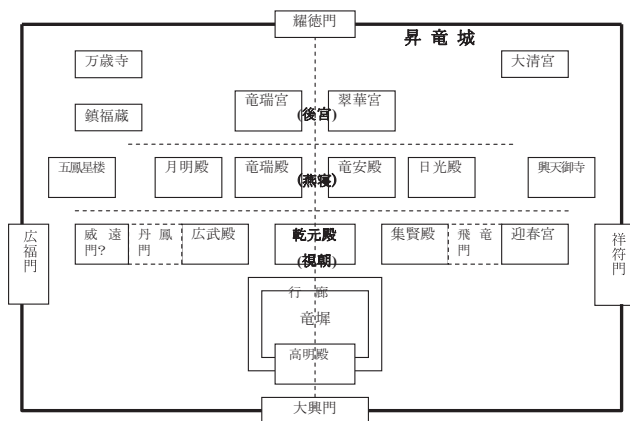


図2 1010／11年の中心部 [Lê Văn Lan 2004: 45; 八尾 2007 : 61 を筆者が修正]

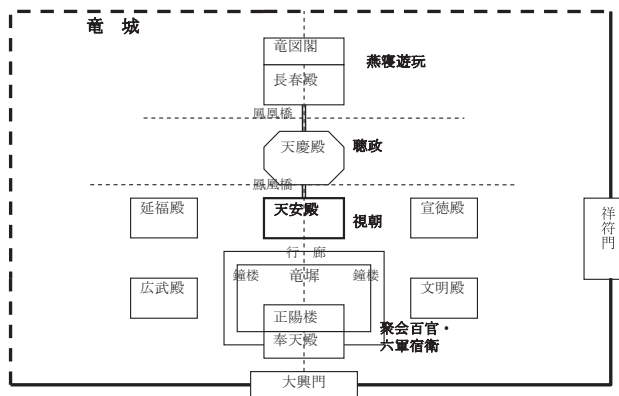


図3 1029／30年の中心部 [Lê Văn Lan 2004: 47; 八尾 2007 : 61 を筆者が修正]

跡で10世紀以前の遺構も確認された近年では、李陳時代の中心も黎朝以降と同じ位置にあったことを前提に考証が進められている。

他方、TT-1014に「昇竜京の四囲に土城を築いた」とある。これは1078年に修したという大羅城 [SL・TT] と同様に、昇竜のもっとも外側に位置し、改廃・修復を繰り返しつつ近世以降の大羅城に連続する城壁の建設

に関する記録と見なされている [Phan Huy Lê 2006: 8-9]。

城壁については次節であらためて考察することにして、本節ではまず、都城に建設された諸施設について概観しておきたい。

宮・殿や楼・閣・台、付属する園池などに関する記録は当然、1030年代以降にも頻繁に現れる⁶⁾。たとえばSL-1046年条（1044年の占城遠征の2年後）に「後苑に銀漢宮を起て占城宮女を居住させた」とあり、同1048年9月条には「瓊林・勝景・春光三園を開いた」とある。1055年の「大内諸殿を修した」[SL・TTは「修大内諸殿宇」]に続き、SLには1058年条に、壺天八角殿、靈光殿とその左の建礼殿、右の崇儀殿、殿前の「六角独柱鐘楼」などを建てたとある⁷⁾。また1055年条に水晶殿、1059年条には永壽殿、などの宮殿名が初出する。聖宗が没した会仙（僊）殿[SL・TT-1072年春正月庚寅条]も、聖宗期（在位1054-1072）に建てられた寝殿かと思われる。

仁宗（在位1172-1127）代では、SL-1087年条に「秘書閣」を建てたとあるが、秘書閣は1210年12月丁巳条に再出する。1098年9月条には「崇淵殿を芳蓮池に造り、左に暉陽殿、來鳳亭を置き、右に映蟾殿、遏雲亭を立てた。前には長鳴楼を起て後ろに玩花橋をかけた」とある。1112年秋9月条に初出する永光殿は、仁宗[SL・TT-1127年12月条]、神宗[SL-1137年秋9月条、TT-1138年9月26日条]がそれぞれ永光殿で没したとあるので、この時期の寝殿として用いられていたものと思われる。英宗が没した瑞光殿[SL・TT-1175年秋7月乙巳]は、1156年に「御天行宮、瑞光殿、鎡雲閣、清和門、儀鳳階、延富閣、賞花亭、玉華階、金蓮池、明月橋および御厨大葉船、宮内大葉船を造った」とあるうちの瑞光殿のことだろう。SLにはさらに、1179年条に鳳鳴殿と崇章殿でそれぞれ、太后と高宗が「辨写古詩」その他の試験を視察したとあり、1180年条には永光・会仙二殿が地震に遭ったとある。TTにも見える後者の記事からは、先帝の寝殿が必ず取り壊されていたわけではないことが推測される。

以上の宮殿の位置はほとんどこれを知る手がかりがないが、SL-1203年条には、「寝殿の西」でおこなった、以下のように大がかりな「新宮」造営が記録されている⁸⁾。

中に天瑞殿を置き、左に陽明殿を起て、右に蟾光殿を起て、前に正儀殿を安んじ、上に敬天殿塔を構えて麗瑤といい、中に永嚴門を啓き、右に越城門を啓き、塔〔テラス〕は銀虹といった。後に勝寿殿を啓き、上に聖寿閣を構え、左に日金閣を構え、右に月宝閣を構え、周囲に廊廡を設け、塔は金晶といった。月宝閣の右に涼石座を置き、閣の西に浴室を起て、後ろに富国閣を構え、塔は鳳簫といった。後に透垣門、養魚池をつくり、池上に玩漪亭を構え、亭の三面は奇花異木を樹え、池水は江に通じ、その彫飾の工、土木の麗は古来ないものであった。

SL-1209年秋7月条によれば、李末動乱の直接のきっかけとなった高宗による范秉彝の誅殺は、「金晶塔涼石処」でおこなわれ、これに怒って大成門⁹⁾から涼石処に突入した秉彝の部下郭卜らは、その後「越城門¹⁰⁾」から出て朝東歩（紅河の船着き場）に下った。高宗は1210年に勝寿殿¹¹⁾で没する〔同10月壬午条〕。SL-1217には「王〔恵宗〕は涼石座に御した」とある。この時期の抗争は、1203年の新宮を主な舞台としていたと思われる¹²⁾。

これらの宮殿以外に、李朝が各地方に行宮を有したことはよく知られており、筆者はそれらの建設と皇帝の行幸が地方統治にとって重要な意味もっていたと考えているが¹³⁾、昇竜のすぐ北、現在のホータイ（西湖）に面した場所にも、罌潭〔SL-1060、SL-1065〕ないし霽潭〔TT-1060〕行宮が設置されている。またこうした皇帝の宮殿以外に、太祖の太子仏瑪（後の太宗）のために「城外」（TTでは「外」）に竜徳宮が築かれ、そこで「民

事を周知する」ことが期待された[SL-1012]。1028年に太祖が没した際に、後述するように仏瑪は東門から乾元殿に入っているのも、黎朝期の『洪徳版図』に見える東宮と同様、竜徳宮は宮禁の東側に位置したものと思われる¹⁴⁾。またSLによれば1063年に「洞仙宮を大内の東に建てた」とあり、長子仁宗は1066年正月にここで生まれる[仁宗紀冒頭]。洞仙宮は竜徳宮に代わって東宮の役割を果たしたと思われる¹⁵⁾。ただし、1065年6月に聖宗皇帝が天慶殿（1030年に建てられた聴政の所）で裁判をおこなった際に、「洞仙公主」（TT-1064年4月条の対応記事では「洞天公主」）が「側に侍った」。この時点では男子がなかった聖宗は、洞仙公主（当時は洞仙宮の主人だったのではないかと推測することが可能かもしれない¹⁶⁾）。

その他の皇子の屋敷については、TT-1033に「帝は長広門外に幸し皇子第宅の落成を観た」とある。長広門はTT-1048に社稷壇（図1参照）を建てたとあるので、もっとも外側の城壁（大羅城）の城門と見られる。したがって、皇子の第宅（屋敷）は大羅城外にあったことになる。「詔して…諸王侯は夜間に城内に来往することをできなくした」[SL-1157]という記事からも、王侯の屋敷が城外にあったことが知れる。ただし後述するように、この「城内」が大羅城の内側を指したかどうかには疑問がある。

仁宗までの皇帝には複数の皇后がおり、それぞれ独自の宮殿と家政機関を有したのではないかと推測されるが、位置などの詳細は不明である¹⁷⁾。太上皇帝や皇太后については、これも正確な位置は不明だが、独自の「宮」が造営されたと思われる。仁宗のオイ神宗が1127年に即位すると、父崇賢侯とその妻杜氏は2年後に太上皇帝・太上皇后とされ、洞仁宮に居住した[SL・TT-1129年正月庚午条]。英宗は生母である太后黎氏のために広慈宮を建てた[SL-1143、TT-1145、TT-1148]。

皇帝権を支える官衙・軍衛の所在についても、詳しいことがわからな

いが、1029年の宮殿建設の記事によれば、竜墀の四囲に廊廡が建てられ、百官を聚会させたり六軍の宿衛をおこなわせたという（図3参照）。廊廡の実例は少ないが、SL-1071に仁宗の重態に際して「有司が官職都の左右廂に誤入したら杖八十とする」という詔が載る。官職都は皇帝に近侍した組織かと思われる¹⁸⁾。また英宗期の権臣杜英武に対する反対派のクーデタ [SL-1148、TT-1150] では、禁軍が英武を捕らえて「左興聖廊に繋いだ」とあり、クーデタ派の中に「左興聖火頭阮楊」がいるので（火頭は下級指揮官クラスの称号か）、左右興聖都という禁軍の部隊¹⁹⁾ があって、そのうちの左興聖都の建物に英武が監禁されたものと思われる。また黎太后などの力で復活した英武は、自分の息のかかった百余人で「奉国衛都」という組織を作りクーデタ派を摘発したのち、「奉国衛都器械廊」の地頭外を往来した者は杖八十、廊内に至った者は死罪という法令を發布した²⁰⁾。軍事面では、1170年に大羅城の南で騎射の演習をさせ「射庭」と名づけたという記事 [TT] が、黎朝期の講武場の前進として知られている。

1011年に建てられた「鎮福蔵」[TT] は、宮中の物資集積所かと思われる。1038年には「御庫」が建てられる [TT-1038]。他方、1010年に「城内」に建てられた興天寺、城外離方の勝巖寺、翌年城内に造られた太清宮、萬歳寺（TTでは前者が左、後者が右）、城外の四大天王寺、錦衣・竜興・聖寿寺などなど、都城内外に多数の寺観・神祠など宗教施設が建設されたことがSL・TTに記録されている。当時の皇帝権力にとって、儀礼・宗教活動が行政・軍事や経済活動に劣らず重要だったことは当然である。「慶成大願仏会」を竜墀で開催したり [TT-1036]、羅漢会を天安殿で開く [SL-1056] などの仏教活動は言うまでもないが、1048年に長広門外に社稷壇が築かれ [TT]、1154年には大羅城南門に圜丘壇が築かれる [TT] など、儒教的活動もある程度見られる。1070年 [SL] と1187年 [SL・TT] には太廟が記録され、文廟は1070年に建てられたとされる [1070年]。1102年に

「開元・太陽・北帝三觀を開く」[SL] など、道教関連の記録も少なくない。「黄竜」が宮殿や御船の上にたびたび現れたこと²¹⁾、「競渡」「競舟」を皇帝が觀覽した記録が頻出する²²⁾ ことなども、李朝皇帝権の独自性のあらわれとして知られている。英宗が竜墀で「捕象」を觀た [SL-1147] など、同じ意味で注目すべきであろう。

都城にはもちろん、マーケットや手工業工房が必要だった。「東市」[TT-1015]、「西市」[SL・TT-1035] ないし「西街市」[TT-1035]、「西市」[SL-1148] ないし「西階市」[TT-1150] という東西の市²³⁾のほか、「南市」[SL-1072年条(仁宗紀)]、「椰市²⁴⁾」[SL-1214正月条]、「蓋市」[同7月条]などの名も見える。都城内の街区は坊や巷と呼ばれ、「窯作巷」[SL-1212年2月条]、「紙作巷」[同1215年5月条]などの名が記録されている。

このほか、紅河東岸に目を向けると、懷遠駅を嘉林（紅河対岸のザーラム）に置いて外国人の宿泊・休息の場所とした [SL・TT-1044年条] とあるように、外交施設が置かれている。ホータイ（西湖）の西岸では、杲社（罪人を置いて公田を耕作させた村²⁵⁾）、婆伽村（チャンパーの捕虜の村²⁶⁾）など、おそらく皇帝直属の隷属民集落が分布する。これらも朝廷にとって不可欠の存在だったろう。昇竜都城の構造を機能面から理解するには、近郊まで含めた総合的考察が不可欠である。

3. 各城壁の位置と空間的分節化

1010年の都城建設の記録を素直に読むと、昇竜京城の城壁は、唐末の節度使高駢が築いた大羅城を踏襲した一重の城壁（その東西南北に祥符、広福、大興、耀徳の4門が造られた）だけが存在したものと読める。高駢の大羅城(TT-863)に見える前身の都護府城のように、内部に「子城」があったかもしれない）は、『資治通鑑』咸通7年（866）条によれば「周三千歩」（1歩＝5尺＝1.5mとすれば4.5km）、TT-866では「周回1982丈5尺」（同じ

く5.95km。なおこれを取り巻く「堤子」は周回2125丈8尺)ということで、周回4～6Km程度の城郭だったと考えられる。古代史家レー・ヴァン・ランは、この城は黎朝期の禁城および阮朝の昇隆（河内）城と大差ないいかくらか広い、方形の都城（北は旧トーリック河、東門は現在のハンプオム通りに面する）だったと考えている [Lê Văn Lan 204: 39-40, 42]。

一方、近世史の側では、禁城ないし宮城－皇城－京城という「三重城郭」をもつ都城モデルを前提に、原図が1490年に描かれたとされる『洪徳版図』所収の地図（図4）——いちばん外側の城壁（大羅城）は一部しか描かれていないが——などの考察がおこなわれてきた。唐の長安では京城

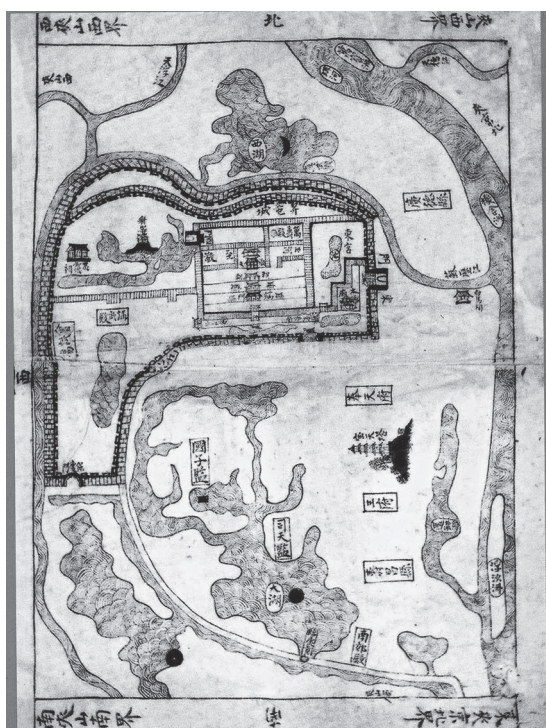


図4 「洪徳版図」A2499本の「中都図」

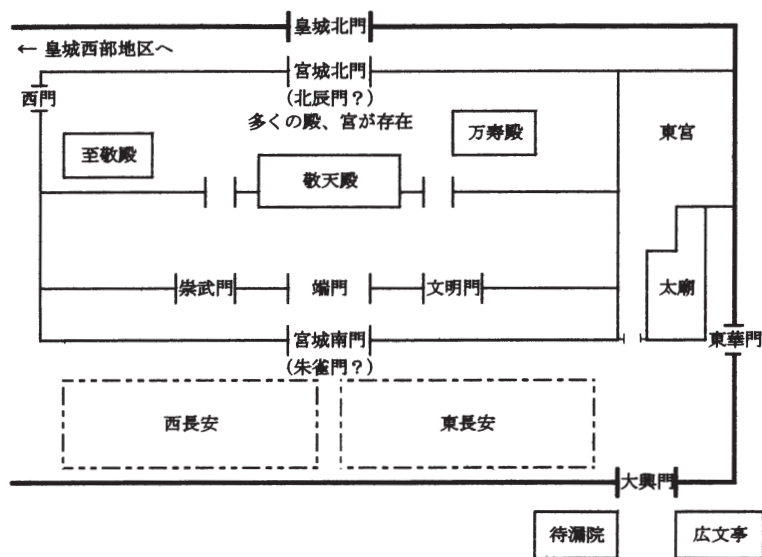


図5 黎朝前期の宮城・皇城東部 [八尾 2007: 69]

の中央北側に宮城（皇帝の空間）と皇城（官衙空間）が並び、宋の開封では大内－内城－外城という同じ中心をもつ方形の城壁が三重に重なる形態が成立したこと、19世紀のフエも紫禁城－皇城－京城の同心方構造をとったことは言うまでもない。この黎朝期の三重城郭は、最近の理解では李朝に遡るものとされている。すなわち、1014年にいちばん外側に京城を囲む土城（1078年の大羅城）が築かれ、真ん中の城壁（1010年の昇竜城を西方に拡張した1029年の竜城）も現在のトーリック河まで達していた。これらで囲まれた区域の形状は、黎朝の京城および1490年に拡張された後の皇城＝昇竜城（図4）と同様に西側・南側に広がった不整形をなしていた。一番内側の禁城（図4・5）のみ方形で、黎朝期の禁城～阮朝昇隆城と大差なく、図1の横線部分が示すほぼ1km四方の区域をおおっていた [Phan Huy Lê 2006: 8-16, 18-19]。ただしこの理解には、1010年の「昇竜城」と1029年の「竜城」の関係、宮禁の範囲などいくつか未解決の問題がある。

上記の通り、TT-1029では、三王の乱後の諸宮殿修築の際にそれらを囲んで「竜城」を築いたとある²⁷⁾。竜城（SL-1049年秋8月条「御溝を鳳城外に鑿った」とある鳳城や、TT-1243に「城内を営んで竜鳳城と号す」とある竜鳳城とも一般に同一視される）について従来は、これを三重城郭の真ん中のもの（皇城）と同一視する説 [Trần Quốc Vượng – Vũ Tuấn Sán 1975: 150 -151; Phan Huy Lê 2006: 9-14]²⁸⁾ と、一番内側の城壁（禁城もしくは宮城）と見なす説 [Phạm Hân 2003; Đỗ Văn Ninh 2004: 25ほか] が対立してきた。黎朝では、初期には（属明期の東関城と同様に）宮城を取り巻く城壁は方形だったと考えられるが [八尾2007: 66]、1490年に「鳳城を広築した。李陳の制によったのである。帝は仁宗が害せられたことに懲りて卒を発しこれを築かせた。九較交場の外に延広八里にわたり、およそ八月後に成った…」 [TT-1490年11月条] とある鳳城の「広築」が皇城の図4の状況への拡大を示すと通常考えられ [Phan Huy Lê 2006: 17]、この鳳城を李朝の竜城＝鳳城と同一視してよければ、1029年の竜城も真ん中の城壁と見なすことができる。ただ、黎朝の認識が正しかったとは限らない。

この問題にはわかに決定しがたいので、一旦目を転じて、宮禁空間（黎朝以降の禁城ないし宮城）を指す史料上の用語について調べてみたい。

「禁城」の語は、TT-1028年条のみに見える。太宗即位に反対した「三王の乱」で、東征・翊聖・武徳の三王が「皆、兵を帥いて禁城に入伏し、東征王は竜城内に伏せ、翊聖・武徳二王は各自広福門内に伏せた」のに対し、太宗方の黎奉暁が乾元殿から出撃して三王を討ったという記事と、乱の平定後に殿前禁軍10衛を設置し「禁城之内」を守らせたという記事である。

ほかに史料には、「禁庭」「禁内」「禁中」「宮禁」などの語が散見する。「白雀が禁庭に集まった」 [SL・TT-1074]、「黄竜が夜、太清宮から禁内に

飛び入った」[SL-1137年10月条] といった記事のほか、李英宗朝（在位1137-75）の権臣杜英武は妻蘇氏「宮禁に出入」して杜太后につかえさせ[TT-1150]、英武に対するクーデタ[SL-1148、TT-1150]の失敗後、クーデタ派は「禁庭に突入した」とがで罰せられる[SL。TTは「突入闕庭」]。李末の内戦が勃発した際、陳氏の軍は紅河に面した東歩頭に泊し、「左掖門より禁中に直入した」[SL-1209年8月条]。また陳氏の主将嗣慶は「怒り、兵を發して竜城に傳り、殿前指揮使阮硬をして官職都を將いて禁中に入らしめ…」たり[SL-1212年12月条]、「軍を引きいて禁中に入り、玩蟾橋を焚いた」[SL-1213年春正月辛酉条。TT-1213年春2月条は「嗣慶が兵をもって闕を犯し、車駕を奉迎したいと請うた」、朝廷軍が陳氏軍に敗れ、恵宗は「大いに懼れて駕を禁中に入らせた」[SL-1214年正月条]、李恵宗は病気で跡継ぎの男子もなく「ひとり指揮使陳守度に委任して殿前諸軍を領し、禁庭に扈衛させた」[TT-1224年条] という記事もある。

また、昇竜の宮禁空間は、「宮」とも呼ばれている。SL-1203年条には上記の通り、「寢殿の西」でおこなった、大がかりな「新宮」造営が記録されている。TT-1028の三王の乱記事を信じる場合、「賊は宮門に逼る」「宮中衛士をして門を開いて出戦させ」などの記述があり、TTだから黎朝期の觀念に従った表現かもしれないが、やはり「宮」の語で宮禁空間を指したものと見られる。

宮禁空間を指すとおぼしき用語でもうひとつ、通常は禁中と同義とされる²⁹⁾「大内」の語も史料に散見する。「大内碑を立てた」[SL-1045]が初出で、その後、「大内諸殿（宇）を修した」[SL・TT-1055]、「三教に詔して大内碑文を修めさせた」[SL-1180]などの記事があり、李末動乱の際には「王・太后が大内に還った」[SL-1213年3月庚午]、「大内に至り、太后は扶楽道將軍潘世に密詔して、烏金侯阮八を誘いこれを殺させようとした」[SL-1214年6月丁未]、西扶列に草殿を起て「その規模は一に大内に

倣った」[SL-1216年3月（？）庚戌]などとされる。

ではこれらの宮禁空間は、1010年の昇竜城や1029年の竜城などの城壁とどんな関係にあっただろうか。

李朝の宮禁空間は、少なくとも北側と南側において、1010年の昇竜城より狭かった可能性がある。まず、1074年に黄竜がそこから「禁内」に飛入したという太清宮（1011年に「城内の左」に建立）は、昇竜城内だが「禁内」にはなかったことになる。太清宮と、同じ1011年に「城内の右」に建てられた万歳寺ほかの建築が正殿の後方＝北方にあったという理解[Lê Văn Lan 2004: 45]が間違っていなければ、宮禁空間の北側で、昇竜城北壁との間に空間があったと見られる。

英宗の前の李神宗（在位1127-37）が即位した際には、「王侯及び文武臣僚を大興門外に退かせ... そうしておいて右掖門を開き群臣を召して竜墀に入らせた」[TT-1127年12月条]とある³⁰⁾。現行テキストは18世紀のものであるが、15世紀およびそれ以前の条文を多数含んでいる『国朝刑律』の51条によれば、大興門（1010年の昇竜城の南門と同名³¹⁾）は皇城の門であるのに対し、禁城の門は4つの等級に（外から内へ？）分かれ——禁門（1010年の昇竜城東門と同名の祥符門³²⁾を含む）、殿第一門、殿第二門、宮門——、左右掖門は宮門に属する。1127年のTTの記事を「大興門の右掖門」と読まずに、両者は別の壁に設けられた門で、宮禁空間は南側においても、昇竜城の城壁との間に空間を有していた、と考えてよいだろう。

TT-1028の三王の乱の記事に、三王が兵を伏せて太宗を襲わんとした際、竜徳宮にいたであろう太宗は、「祥符門から入って、乾元殿で変を覚った」とあり、『国朝刑律』の祥符門の位置から見ても、宮禁空間の東限は1010年の昇竜城の東壁の位置で変化しなかったのかもしれない。三王の乱ではTTを信じれば、太宗側が「門を開いて出戦」した際に、黎奉暁が広福門（1010年の昇竜城西門）まで進撃して武徳王を斬っている。この記事全体

が後世の創作でないとすれば、宮禁空間の西側で、広福門のある昇竜城西壁との間に空間があったとも解釈できる³³⁾が、黎朝禁城の西門（図4参照）のように城の西北隅に門があったとすれば、1028年時点での宮禁空間の西端は、昇竜城西壁と一致したと見ることも可能である。

なお、広福門は1029年以降の史料に現れず、その他に宮禁の西壁に比定できる門名も見あたらない。SL-1203には、越城門は天瑞殿の「右」つまり西のように書いてある。しかし、1210年に陳氏軍が右腋門から入って沙墀・竜墀に屯し、別働隊を千秋門（位置不明）に屯させて近臣の杜広・費例を襲った際に、秘書閣にいた費例は「竜門」で様子を窺ったのち、越門（越城門か）から延具門（延興の誤写と見られ、SL-1059の「造延興士恒門」と関係あるかもしれない）を出て、千秋門を抜けることに成功した。Phan Huy Lê 2006: 11が引く永祚六年（1624）の「東門碑記」には「延興坊」が見えるので、越城門や延興門は宮禁空間ないし昇竜城の、東側の門だったようにも思われる。1203年の新宮造営は、1010年の昇竜城より西に張り出して造営されたと考えることも無理ではないが、そう断定する根拠も見あたらないのである。

宮禁の範囲に関しては、「大内」の記事から疑問が生じる。1024年に「城内」[TT] に建てられた真教禪寺は、1224年の恵宗の出家の記事では「大内真教禪寺」[TT-1224年10月条] と呼ばれる³⁴⁾。万歳寺の場合も、1011年に「城内の右」[TT] に建てられたはずが、李朝までの高僧伝で14世紀に編まれた『禪苑集英』³⁵⁾では、「大内万歳寺」[巻2: 10a] とされたり「昇竜京万歳寺」[同17b] と呼ばれる³⁶⁾。また、上述の通り1011年には「城内の左」に大清真宮が創建されるが、「臨波橋を真教禪寺に造った。玩蟾池を跨ぎ景靈宮・大清真に抵った」[TT-1248年4月条] という記事の大清真が大清真宮と同一であれば、13世紀の真教（禪）寺は大清真宮と近接していたことになる。その大清真は1137年段階で、上記の通り「禁内」にはない³⁷⁾。

1010-11年の記録に見える「城内」は、昇竜城（高駢の大羅城にほぼ相当。ただし1024年の修復の際に範囲が変化した可能性はある）の内側を指すとしか読めない。それでは李朝の大内は、1010年の城内と同義、すなわち宮禁空間より広い範囲を指したと見てよいだろうか。それを考えるには、「城内」「城外」の用法も検討する必要がある。「城内」には、1010-11年の建設記事のほか、「大水が城内に入った」[SL-1078年条]、「詔して…諸王侯は夜間に城内に来往することをできなくした」[SL-1157年条]などの用例がある。TT-1037年条には弘聖大王祠を「城南門之西」に建てたとあるので、「城内」と「城外」の両区域の間には実際の城壁がある。

現在の文廟に近い弘聖大王祠の位置(図1参照)から見て、1037年の「城南門」は、大興門を指したと見るのが自然である。つまりそれは、宮禁空間の南門ではないし、もっとも外側の城壁つまり1014年に造られた「大羅城」の、長広門（チョズア＝椰市や社稷壇がある）や南門³⁸⁾を指すとも考えにくい。ではこの「城」が、「大羅城」を指さないのはなぜだろうか。豊田[2008]によれば、隋代以前の中国の観念では「京城」の範囲に含められるのは「宮」と「城」（行政空間だがこの段階では居住空間も含む）の2空間のみで、「城」の外側の「郭」＝「近郊」空間は、「京」には含まれるが「京城」には含まれない。「近郊」の外側に城壁（郭）が築かれる場合も多いが、それは簡素であり軍事的意義をもたなかった。唐代にはじめて、外側の城壁の内部すべてが京城と観念されるようになったが、京城の城壁はなお宮城・皇城のそれより低いものだった点、前代の「城」と「郭」の区別を引きずっている。初期の昇竜のプランにも、同様の区別が反映されていたのではないか。そうだとすれば、1014年段階の昇竜「京」は近郊（城外）空間を含んでいたが、その四囲の城壁は土城で十分だったと考えられる³⁹⁾。逆に「昇竜京城の内に宮殿を起造した」[TT-1010年7月条⁴⁰⁾]、「昇竜京城を修治した」[TT-1024年条]と言った場合は、宮禁空

間（宮）と内城空間（城）だけを含んだ昇竜城の意味だったのだろう。

大内の問題に戻ると、平安京の大内（おおうち⁴¹⁾）が禁中を指す場合と城内を指す場合の両方があった〔福山1987〕のと同様に、宮禁空間の（私的）王権と内城空間の（公的）国家権力との未分化を背景として概念の混交が生じたという考えも、不可能ではなからう⁴²⁾。

しかし、1010-11年や1137年には宮禁空間に含まれなかった真教寺などが1224年までには大内に包摂されていた、つまり宮禁空間が広がったと見る方が自然ではある。そう考えるのに有利な材料として、李末ないし陳初には「城内」や「京城」の範囲も広がっていたふしがある。まず、1227年に陳朝は「盟誓の決まりを宣布した。李朝故事に循い... 毎年四月四日に、宰相百官は... 味爽に進朝する。帝は大明殿右廊門に御し、百官は戎服を着け、再拝して退く... 城の西門を出て銅鼓神祠に至り会盟する...」〔TT〕という。李陳朝の「城の西門」がそのすぐ近くにあったとも言いきれないのだが、銅鼓神祠は黎朝皇城の西北隅にある。1010年の昇竜城より「城」空間が西方に拡大しており、そこは主に宗教・宴遊空間に充てられた〔Phan Huy Lê 2006: 12-14〕⁴³⁾ とする考えは、無理とは言えない。

京城については、「京師人」〔SL・TT-1016年条〕と「京城人」〔SL-1209年条〕が史料に見えるほか、SLには「京城黃男」〔1083年〕、「京城婦人」〔1099年〕などの語も記録され、1103年には「京城内外に詔して皆築堤して水を捍がせた」とある⁴⁴⁾。これらの記事の京城は、「城内」より外側の地区を含むと見られなくもない。「京城の民家が常夜失火し、帝は城を出て救火を観た」〔TT1278年2月条〕という記事に至って、当時の「京城」が「城」（竜鳳城？）の外側も含んだことが明示される。ただし首都の区分で明らかに大羅城の内側全体を指す「左伴」「右伴」の記録を見ると、李朝では銅鼓神廟を「大羅城右伴聖寿寺之後」に建てさせた〔TT-1028年3月条末〕という一例しか見えず、陳朝になって「京城左右伴坊を定めた」

[1230年条]、「京城右伴西街坊」[1295年条]、「京城右伴橋閣台坊」[1304年条]などの記事がTTに現れるので、確実に京城が元来の「城外」を含むようになったのは、陳初のこととせねばならないだろう⁴⁵⁾。

最後に、「竜城」問題に戻ろう。やはり2つの解釈が成り立つ。第一に、陳氏の侵攻に関するSL-1212の記事は、竜城という城壁の内側が禁中だったと読むことが可能であろう。これと1029年の建設記事からは、竜城は宮禁空間のみを囲んだ（一番内側の）城壁と素直に読んでよさそうに思われる。その範囲は、1010年の昇竜城ないしそれが西側に拡張されたもの、つまり大興門を含む城壁（その内側が「城内」と呼ばれる）よりは狭かったことになる。ちなみに1490年の地図（図4）には、宮城から直線状に西に伸びて講武場の北を通る城壁が、宮城や東宮の城壁と同じ表現で描かれている⁴⁶⁾。これが李朝の竜城の一部（を1490年に修復したもの）を示す可能性があるだろう。1459年の仁宗殺害（下記）のような東門からの襲撃に備えて、西方への逃げ道を確保した城壁と考えることは、説得的と思われる。

もっとも、竜城は元来、昇竜城の略称だったかもしれない（注28参照）⁴⁷⁾。「城内」はその内部を呼んだもので、1029年の竜城の内部には記録されていない多数の宮殿があった、1212年の記事も「竜城を越えてさらに内側に進み禁中に入った」意味だ、と解釈できる可能性も否定はしがたい。1490年の鳳城拡張の理由とされる黎仁宗の暗殺事件は、TT-1459年冬10月3日条によれば、諒山王宜民のひきいるクーデタ派が「夜に梯をかけ、三道に分かれて東門城に上り（上東門城）宮禁に盗入して」起こしたものだ。この「上東門城」がベトナム語の語順で「城の東門に上った」意味だとすれば、これも「まず昇竜城（皇城）の城門（図4参照）を越えて、それから宮禁に侵入した」と読みとれる。つまり、宮禁空間のみを囲む壁（これが鳳城で、竜城＝昇竜城とは別と考えることが可能である⁴⁸⁾）

は、昇竜城の城壁⁴⁹⁾ほどの高さや幅をもたず、防御施設としての重要度は低かったのかもしれない。

4. 暫定的結論

以上のように李朝の昇竜については、宮殿や城壁、寺観や園池などさまざまな建設の記録があるが、その位置や改廃についてはわからないことばかりである。あえてまとめれば、1010年段階では単一の城壁（昇竜城）しかもたなかったと見られる昇竜都城は、その後の城壁の整備により、3つの空間に分けられた。(A) 宮禁空間（大内が本来指す範囲）、これは1010年の昇竜城より狭い。(B) 1010年の昇竜城に由来する「城内」空間。(C) その外側の「城外」空間である。(A) (B) はもともと方形だったが、(C) は不整型の大羅城の内部だけでなく、その外側も一定の意義を有した。おそらく当初の京城（昇竜京城）は(A) (B) 空間だけを包含し、(C) は「京」には含むが京城には含まなかった（陳初までに(C)の内側全部を含むように変化している）。また(A) (B) は、李末ないし陳初に西方に拡張された可能性がある。

李朝の昇竜京は全体として、黎朝のそれにほぼ等しい範囲を覆っていたと考えられる。ただし、1029年に築かれた竜城、1049年に記録されている鳳城などの位置と相互関係、それらと黎朝の宮城、皇城との連続性などは不明なままである。また陳朝の宮禁空間は、右が皇帝の官朝宮、左が上皇の聖慈宮と分かれていたはずだが [TT-1230]、その区分の実際も未解明である。したがって、李朝と黎朝の具体的な連続性を安易に推測することは危険であり、考古学とも連携した、より詳細な研究がまたれる。

注

- 1) これまでの主な研究や調査報告としては、Trần Huy Liệu (chủ biên) 1960; Trần Quốc Vương – Vũ Tuấn Sán 1975; Viện Khảo cổ học 2006; Ủy ban Nhân dân Thành phố Hà Nội 2009 (Phan Huy Lê 2009を含む); Papin 2001; 上野 2005; 八尾 2007のほか、雑誌 *Khảo cổ học* 2000(3); 2004(4); 2006(1); 2007(1)などに相次いで特集が組まれ、Hà Văn Tấn 2000; Tổng Trung Tin et. al 2000; Lê Văn Lan 2004; Tổng Trung Tin 2004; Phan Huy Lê 2006; Nguyễn Quang Ngọc 2006; Tổng Trung Tin - Bùi Minh Trí 2007ほか多くの重要論文が載る。また2008年11月に考古学院でタンロン皇城遺跡に関するシンポジウムが開かれ(井上2008などの報告あり)、12月の「第3回ベトナム学国際会議」でも数本の報告がおこなわれている。それらの紀要の出版が望まれる。
- 2) 1999年の端門周辺の発掘で、李朝のタイルを再利用した陳朝期の遺構が発見され、ベトナム考古学界ではこれを正殿南方の王道と解釈して、近世の敬天殿と同じ位置に李陳時代の正殿(その位置はこれまで謎だった)もあったものと考えた [Hà Văn Tấn 2000; Tổng Trung Tin et. al 2000]。
- 3) 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))「中近世ベトナムにおける権力拠点の空間的構成」の成果の一部である。また本論文のもとになる構想は、2008年12月に開催された第3回ベトナム学国際会議で報告した(Momoki Shiro 2008)。
- 4) 李陳時代ベトナム史の研究動向全体については、桃木(近刊)、特にその序章を参照されたい。
- 5) 『大越史記全書』(本稿では陳荊和校合本を使用)の検索は容易であるので、引用時にはいちいち巻数、年次や葉数などを示さず、その年の大部分が含まれる西暦年号のみを用いて、順天元年(1010年)であればTT-1010のように表示する(同じ年内の記事が多数ある場合には、必要に応じてTT-1010年秋7月条などと月日を補ったり、TT-1028年5番のように校合本の記事番号を示す)。『大越史略』(SL。これも陳荊和校合本)も同様に扱う。
- 6) 1010年と29年の間にも、1017年に地震で乾元殿が損壊した [SL-1017]、その後は東殿(集賢殿であろう)で視朝したが、またも地震があったので西殿(講武殿であろう)で視朝した [SL-1020]、西殿には三殿を建て前殿で視朝し後二殿で聴政した [TT-1020] といった記事がある。Lê Văn Lan 2004: 44は1010-1011年と1029-1030年のほかに、1020年、1058年、1098年、1203年の計6回、まとまった建設事業がおこなわれたとしている。
- 7) ホアンジエウ通り18番地遺跡で李朝中期の六角形建物群の柱礎が発見されているが [井上2008ほか]、注22のように靈光殿は紅河に面した地点に

あったらしい。六角形建物があちこちに造営されたということだろうか。

- 8) 本誌の読者のうち漢文に通じた方は少数だろう（筆者も「漢文東洋史」系の読者だけに向けて本稿を書こうとは思わない）。そのことと紙幅の節約のため、本稿の本文で漢文史料を引用する場合は、原文や書き下しでなく訳文だけを掲載することにした（注ではケースバイケース）。
- 9) SL-1203年9月条に、「大黃人費郎反。先是大黃人築大城門。聞林邑・陀某邑已叛、遂率衆逃歸而反」とある「大城門」は、この「大成門」と同一で、1203年の造営事業で建設されたと見てよいのではないか。
- 10) SL-1148 (TT-1150) のクーデタ記事で、反杜英武派が「越城門外」に詣でて英武の罪を呼ばわったとするので、越城門が1203年の初建かどうかは疑問の余地がある。
- 11) TT-10月28日壬午条では「聖寿宮」とする。
- 12) 恵宗と母の譚太后が陳氏を嫌って逃げ回るので、陳氏は1214年3月に一旦、恵文王を即位させる。その即位式は天安殿でおこなわれており [SL]、旧来の宮殿も残ってはいたらしい。SL-1222にも王（恵宗）と太后が天安殿に御して、陳嗣慶の息子顕道王海の婚礼を観たとある。ただしSL-1216年3月(?) 庚戌条には、ようやく嗣慶に降った恵宗に対して、嗣慶は西扶列（昇竜南方の紅河西岸）に草殿を立て、「其規模一倣大内」という。SL-1218年条と1219年条にそれぞれ、恵宗が「旧京に幸した」とあるので、この時期は西扶列が「新京」と扱われていたのかもしれない（SL-1223によれば嗣慶は「扶列第」で没し、王と太后が「臨其喪、哭之尽哀」したとある）。
- 13) 桃木（近刊）：第六章第二節4「統治拠点としての行宮」。
- 14) 聖宗（日尊）については、SL、TTとも聖宗紀冒頭に竜徳宮で生まれたと明記し、TT-1033には皇太子として竜徳宮に居らせたことも見える。なお竜徳宮は「城外」にあったが、黎朝の東宮（図4・5参照）は、皇城の東門（東華門）より内側にあるので、両者が同じ位置にあったと速断はできない。
- 15) 洞仙宮はこの後記録に現れず、宮殿としての東宮がどうなったのかわからない、高宗 [TT-1075年春正月条]、恵宗 [同1208年春正月条] はいずれも、皇太子として東宮に居たとされている。
- 16) 聖宗自身が皇太子（開皇王）時代に、広武殿で聴訟している [TT-1040]。
- 17) 桃木（近刊）：第五章第三節3「皇帝の妻と母」参照。なお聖宗が没した翌年に、嫡妻の上陽太后は仁宗の生母倚蘭皇太妃によって死に追い込まれるが、その「聖宗への殉死」は「上陽宮」でおこなわれた [SL・TT-1073]。これは皇太后の宮殿というより、皇后の宮殿をそのまま使用していたもののように思われる。他方、聖宗時代の倚蘭（元妃）は、「遊蟾閣」に住んでい

た [SL-1065]。

- 18) TT-1128年34番に「詔群臣及官職都盟于大興門外、欲行送葬仁宗礼也」、同38番に「詔劉慶覃・牟僉都選官職都」とあり、官職都は「群臣」とは別のカテゴリーで、選ばれて服役したものらしい。TT-1031年3番では「詔王侯公主百官家奴、不得娶官職都・百姓女」とあり、「家奴」「百姓」の両方と区別されている。TT-1037年10番には「察諸朝班官職都不得以其子与他人養育、倚托權勢…」とあり、權勢家との結託が警戒されている。SL-1157に「諸殿前使・官職都・火頭不得服私家役」とある。同書1175年条では太后が高宗にかえて即位させようとした保国王が、「蘇歷江から小舟で」宮中に入ろうとして銀河門に至ったところを官職都が阻止しており、同書1185年条では「官職」に命じて捕虜の口を木魚でふさがせ杖殺している。通常の禁軍とは違うが、警察ないし憲兵的な機能をもっていたのかもしれない。
- 19) SL-1104年春3月条に新たな徴兵と禁軍編成の記事があり、玉塔都、興聖・広武都などが置かれたとある。またSL-1112には皇帝の子と称した覚皇を呪い殺そうとした徐路道行が、興聖廊に繋がれたとある。
- 20) 李朝期の「都護府」[SL・TT-1067、SL-1097、SL-1107、SL-1219など]と「上林院」[SL-1198、1215、1219]が裁判に関わる施設で、それぞれ実務家として「士師」が置かれたことが知られている。1178年に成った南宋・周去非の『嶺外代答』安南国条に「其宮室有水精宮、天元殿、制皆僭偽。別有一樓、勝曰安南都護府」とあり、建物として安南都護府が存在したことがわかるが、その位置は不明である。SL-1100には上林国「園」士師「任命の記事があるので、上林院は、1065年に開かれた上林園 [SL] の中に設置されたのだろうか。
- 21) 李朝の竜崇拝については片倉穰 [1993] の研究がある。
- 22) ベトナムのボートレースについては、和田1982がつとに注目している。当初は廬江 [紅河] 歩頭に1011年に建設した含光殿で観覧したが [TT-1012、SL・TT-1013、TT-1037、TT-1138]、のちには水晶殿 [SL-1055]、1058年に建造された靈光殿 [SL-1080、TT-1118、TT-1119、TT-1122、TT-1123、TT-1130] や、1148年に完成した皇太后の広慈宮 [SL-1149、TT-1151] など観覧している。水晶殿 (SL-1059では百官の朝見をおこなっている) や広慈宮は紅河に面していたとは考えにくい。皇帝が地方に下る際に船を利用した例は多いから、むしろ都城中心部にまで大きな水路や池が造成されていたと見るべきであろう (SL-1049年秋8月条の「鑿御溝於鳳城外」などが思い出される)。靈光殿も、左右には建礼殿、崇儀殿などの官殿が並び、1118年2月に真臘の使者が春筵宴礼および「慶成七宝塔会」に列席させられている [TT]

ように、競舟・競渡の観覧専用の宮殿ではない。ただし「大越国李家第四帝崇善延齡塔碑」（以下「延齡塔碑」）に李仁宗について「向長瀘之碧川、御靈光之宝殿、千艘而中流電速、万鼓而溢水雷鳴」という対句があり〔『越南漢喃銘文匯編第一集 北属時期至李朝』（*Épigraphie en chinois du Viêt Nam* vol.1; *Văn khắc Hán nôm Việt Nam* tập 1), 潘文閣 [Phan Văn Các]・蘇爾夢 [Claudine Salmon] (主編)、河内：漢喃研究院・遠東学院、1998、tr.134)、長瀘は瀘江＝紅河を指す。『欽定越史通鑑綱目』正編卷4：李仁宗会祥大慶10年（1119）条注でも「在富良江歩頭」とする（富良江も紅河のこと）ように、紅河に面した位置に付属の宮殿を含む大規模な造営がおこなわれたと見るべきか（TT-1237に「移造靈光殿於東歩頭、号風水殿」とある）。

- 23) ただしこれらの記事は、1035年の「起造西市及長廊」[SL] ないし「創立西街市及其長廊」[TT] 以外は、すべて公開処刑の記録である。
- 24) 社稷壇跡の近くに Ô Chợ Dừa (ôは城門、chợは市場、dừaはヤシ) の地名が現存し、大羅城の長広門はここにあったものと見られている。
- 25) TT-1230に見え、杜英武も TT-1150によれば、上述のクーデタで一旦捕らわれ「果田宏」（果社で公田を耕作する隷属民の呼称）とされている（李朝の皇帝直属の隷属民については、桃木近刊：第一章第三節参照）。
- 26) 婆伽村自体の初出は TT-1330 年条に見える昭文大王日遙に関する「好与外国人遊、常騎象遊婆伽村」なのだが、その記事の割注に「其村迺李聖宗征占城、虜獲占人居之…」とあるように、この種の村落は昇竜近郊に李朝期から存在したと思われる。15世紀までの大越の王権や社会にとって、チャンパー系の「奴婢」や技術者・兵士がかなり重要な役割を果たしていたことが、各分野で推測されている（研究の概況は桃木近刊：第四章を見よ）。ホアンジェウ通り18番地遺跡でも、チャム文字の刻まれたタイルが出土している [Viện Khảo cổ học 2006: 112]。
- 27) 本文に引く通り、TT-1028の「三王の乱」の記事に竜城が見えるが、『大越史略』では、三王の乱に関して禁城・竜城などの城壁名は記さない。初建か重修かを必ずしも明確に区別しない SL や TT の表現法から見て、1028年以前にすでに竜城が出現していた可能性なしとしないが（「竜城」は元来、「昇竜城」の略称だった可能性もある。『禪苑集英』（注35参照）では昇竜京の呼称が頻出するが、「竜京万歳寺」と書く例がある [巻1：24a]）、TT-1028に従うと、三王が全員禁城内に伏せ、そのうち東征王のみ竜城内に伏せたのだから、竜城が禁城の内側にあったことになってしまうという大きな矛盾がある。無批判に TT に依拠するのは危険である
- 28) どちらも竜城＝皇城の位置比定の手段として1010年の昇竜城の東西南北

各門の位置比定を試みている点から見て、1010年の昇竜城を皇城（黎朝期皇城は昇竜城とも呼ばれる）と同一視していると思われる。ただしヴオーン・タンがこれを黎朝禁城と似通った範囲（これは結局、竜城＝禁城説が想定する範囲と同じ）で考えていたのに対し、レーは1490年以降の黎朝皇城と同様に西に広がっていたと考える点に違いがある。またヴオーン・タン説のユニークな点は、皇城内を竜安殿・竜瑞殿や翠花宮など皇帝の居住空間である禁城と、乾元殿（天安殿）を含む官吏・貴族の行政空間に分けていることである〔Trần Quốc Vương – Vũ Tuấn Sán 1975: 151-152〕。あるいはフエ都城からの類推か。フエの「紫禁城」は「皇城」の内側にあるが、「大朝正殿」である太和殿やその前の丹陛、午門などを含まず、「常朝正殿」である勤政殿から後ろの部分だけを含む。

- 29) たとえば『唐会要』巻30「以京大内為太極宮」。
- 30) 先帝の実子（しかも成人に達した皇子）による継承を続けてきた李朝において、男子のない仁宗（在位1072-1127）の後継者としてオイで未成年の神宗が即位しえたことを、王朝権力の構造の重大な変化ととらえた研究に、Wolters 1976; Poliacóp 1996:145-150がある。
- 31) 位置も同じだったかどうかはわからない。「延齡塔碑」〔越南漢喃銘文匯編第一集, tr.135〕に「建広昭之燈台、向端門之廷上」とあるのが、同書注51の通りSL-1116年条の「設広昭灯於大興門外」にかかわるとすれば、当時の大興門は端門の正面つまり正殿の真南にあったのかもしれない（図4参照）。
- 32) 1320年に英宗上皇が天長府（ナムディン）で没した際、「引梓宮入祥符門、奉安於聖慈宮」〔TT〕。聖慈宮は皇帝の宮の左（東）にあった上皇の宮だから、陳朝の祥符門は当時の宮禁空間の東門に当たっていたものかもしれない。
- 33) 「延齡塔碑」〔越南漢喃銘文匯編第一集, tr.136〕に、現在のホー・チ・ミン廟に近接する延祐寺（一柱寺）が「向西禁之名園」とあるが、禁中のすぐ西とは限るまい。
- 34) 李恵宗が真教寺で自殺したとき、陳守度は「鑿城南壁為門出樞、就安華坊火化」〔TT-1226年8月条〕した。真教寺は城内の南寄りにあったものか。
- 35) 漢喃研究院蔵の永盛11年（1715）刊本。
- 36) 陳朝の資福寺も、陳朝前期の高僧伝『三祖実録』（漢喃研究院蔵成泰15年（1903）刊本）の中で「大内資福寺」〔2a、28a、28b〕、「入内資福寺」〔21b〕と呼ばれている。同史料で真教寺は「大内真教寺」〔14b〕とされる。
- 37) 1128年に神宗が「大清・景靈二宮及び城内諸寺觀」に〔TT2月戊辰条〕、1166年に英宗が景靈宮に「幸」した〔SL〕記録も、大清真宮（觀）や景靈宮は、宮禁空間の外部と認識されていたことを示すように見える。

- 38) 長広門はTT-1033、TT-1048（「立社稷壇于長広門外」）、「大羅城南門」はTT-1154（「帝御大羅城南門、觀築園丘壇」）に見える。
- 39) 阮朝が編んだ『欽定越史通鑑綱目』が「築昇竜城土城。京城外四圍悉令起築土城」[1014年]、「修昇竜城」[1078年]とするのは不適切と考える。この誤りの一因は、阮朝フエの京城の觀念に従ったこと（TT-1170年条で「帝習射騎于大羅城南」とあるのを『綱目』で「帝閱習于京城之南」とする点からも裏付けられる）、別の原因は高駢の大羅城と李朝の大羅城を同一視（混同）していることであろう。
- 40) SLが1010年の宮殿建設を「昇竜京内」としているのは、これはこれでSLの粗雑な点か、もしくは当時の觀念の不統一を示すものであろう。
- 41) 12世紀以後には「大内裏」の漢字が使用され（訓は依然「おおうち」）、近世には「だいだいり」と読むようになった。
- 42) 「禁京城内外諸人家奴婢、不得刺墨胸脚如禁軍様...」[TT-1118年条]、「詔京城内外三家為一保」[SL-1136年9月条]などの法令に見える京城内の人家は、城内空間にあったことも考えられる。
- 43) その場合、唐長安城北方の禁苑について、妹尾2001：113という宮城防衛や、豊田2008：62-63(注55)が言う非常時の逃げ城の機能が想定されるのと同様に、軍事的な意味ももっただろう。
- 44) おそらくこの詔の結果として、紅河に面した機舎巷（坊）の堤防が1108年に築かれている[SL・TT]。
- 45) ただし1490年の絵図では、大羅城は南側（図4で皇城の南端から東南に伸び、大湖の南～南郊殿を通る道路状の線）のみで東側が描かれていない。TT-1477「大羅城に石積みさせた（砌大羅城）」など大羅城の存在を示す記事はあるのだが、一部しか残存していなかったのではないとすれば、隋唐以前と同用に内城の外側の都市域を京城とは見なさない、明清の理念[新宮2008：160-165；豊田2010]が影響したのだろうか。
- 46) この描き方を重視すれば、この城壁を李陳の皇城（真ん中の城壁）とするPhan Huy Lê 2006: 18の説は苦しくなる。
- 47) 黎朝でも、TT-1491年7番によれば、大興門外に築かれた広文亭は、「在竜城之中、鳳樓之前」に位置したとされ、竜城が昇竜城（皇城）の意味で用いられているらしい。
- 48) 通常、1490年に「広築」された城壁は図4で講武場の南を通る城壁（昇竜城の）と見なされているが、それは李陳時代から存在したもので今回建造したのはその北の直線状の城壁である、または1490年に講武場の南北両方の城壁を建造した、と考えることが、どちらも可能である。通説の根拠は「九

較交場」を講武場に比定することだろうが (Viện Khoa học Xã hội Việt Nam, *Đại Việt sử ký toàn thư*, tập II, tr. 508 など)、その根拠は不明なのである。

- 49) SL-866によれば、高駢の羅城は高さ2丈6尺 (TTでは2丈5尺)、脚広2丈6尺だった。李朝以降の「城」も、少なくとも同程度つまり8m前後の高さと基底部の幅をもっていただろう。これは隋の大興の宮城・皇城 (平均幅約18m、高さ10.3m) には劣るが、大興の郭壁 (平均幅約9~12m、高さ3mほど) [豊田2010] より高い。

参考文献

- 新宮学2008.「近世中国における皇城の成立」王維坤、宇野隆夫編『古代東アジア交流の総合的研究』、国際日本文化研究センター、pp.139-178.
- 井上和人 2008.「タンロン皇城遺跡の宮殿遺構：A, B, D 4/5/6 区を中心とした発掘遺構の分析」[シンポジウム “Xác định giá trị của di chỉ Hoàng thành Thăng Long sau 5 năm so sánh nghiên cứu (2004-2008)”]. 「5年間 (2004-2008) の比較研究の後にタンロン皇城遺跡の価値を確定する」 Hà Nội, 23-25/11.
- 上野邦一 2005.「ハノイの歴代宮殿跡の考察」『東アジアの古代文化』123、pp. 124-133.
- 片倉穰1993.「ベトナム李朝の竜崇拜——『大越史略』を通して——」『歴史研究』(大阪府立大学) 31、pp.33-50.
- 妹尾達彦2001.『長安の都市計画』講談社 (選書メチエ).
- 豊田裕章2008.「中国における都城の概念の変化と日本の宮都」、王維坤・宇野隆夫編『古代東アジア交流の総合的研究』国際日本文化研究センター、pp. 19-66.
- 豊田裕章2010.「中国における都城モデルの変遷と古代日本の都城」ワークショップ “Những kết quả nghiên cứu mới về hoàng thành Thăng Long” [タンロン皇城に関する新しい研究成果] 報告, Hà Nội, 18/8.
- 福山敏男 1987.「大内裏」『国史大事典』吉川弘文館、p. 798.
- 西村昌也2008.「ヴェトナム三都物語 前編 タンロンの歴史」『東南アジア埋蔵文化財通信』第9・10号 (合冊)、pp.5-22.
- 桃木至朗 (近刊). 『中世大越国家の形成と変容——地域世界の中の李陳時代ベトナム史』大阪大学出版会.
- 八尾隆生2007.「ヴェトナム黎明前期昇竜城研究初稿」『広島東洋史学報』12、pp.54-75.
- 和田正彦1982.「ヴェトナムにおける競渡・競舟について」『稲・舟・祭—松本信広先生追悼論文集—』六興出版、pp.351-367.

- Đỗ Văn Ninh 2004. Những hiểu biết mới về thành Thăng Long, *Khảo cổ học* số 4, tr. 21-35.
- Hà Văn Tấn 2000. Khảo cổ học với Thăng Long, *Khảo cổ học* số 3, tr. 2-8.
- Lê Văn Lan 2004. Vị trí, quy mô và vấn đề “trục chính tâm” của các công trình kiến trúc cung đình trong Hoàng thành Thăng Long thời Lý qua tài liệu văn bản, *Khảo cổ học* số 4, tr. 39-50.
- Momoki Shiro 2008. Một số câu hỏi mới về kinh đô Thăng Long thời Lý-Trần: Khai thác lại thư tịch cổ, Hội thảo Quốc tế Việt Nam học lần thứ ba, Việt Nam: Hội nhập và Phát triển, Hà Nội, ngày 4-7 tháng 12 năm 2008.
- Nguyễn Quang Ngọc 2006. Thăng Long thời Lý-Trần-Lê dưới ánh sáng của các nguồn tư liệu mới, *Khảo cổ học* số 1, tr. 28-34.
- Papin, Philippe 2001. *Histoire du Hanoi*. Paris: Fayard.
- Phạm Hân 2003. *Tìm lại dấu vết thành Thăng Long*. Hà Nội: Nxb Văn hóa Thông tin.
- Phan Huy Lê 2006. Vị trí khu di tích khảo cổ học 18 Hoàng Diệu trong cấu trúc thành Thăng Long-Hà Nội qua các thời kỳ lịch sử, *Khảo cổ học* số 1, tr. 05-27.
- Phan Huy Lê 2009. Khu di tích trung tâm Hoàng thành Thăng Long – Hà Nội: di sản văn hóa dân tộc và giá trị có ý nghĩa toàn cầu, Ủy ban Nhân dân Thành phố Hà Nội 2009, tr. 154-172.
- Poliacóp, A.B.(Vũ Minh Giang và Vũ Văn Quân dịch) 1996. *Sự phục hưng của nước Đại Việt thế kỷ X-XIV*. Hà Nội: Nxb Chính trị Quốc gia.
- Tổng Trung Tín 2004. Kết quả thăm dò khảo cổ học Đoàn Môn, Bắc Môn, Hậu Lâu, 62-64 Trần Phú và vấn đề vị trí, quy mô của Hoàng thành Thăng Long thời Lý-Trần-Lê, *Khảo cổ học* số 4, tr. 10-20.
- Tổng Trung Tín, Bùi Minh Trí 2007. Về một số dấu tích kiến trúc trong cấm thành Thăng Long thời Lý-Trần qua kết quả nghiên cứu khảo cổ học năm 2005-2006, *Khảo cổ học* số 1, tr. 58-72.
- Tổng Trung Tín, Trần Anh Dũng, Hà Văn Cẩn, Nguyễn Đăng Cường và Nguyễn Văn Hùng. 2000. Khai quật địa điểm Đoàn Môn (Hà Nội) năm 1999, *Khảo cổ học* số 3, tr. 11-32.
- Trần Huy Liệu (chủ biên) 1960. *Lịch sử thủ đô Hà Nội*. Hà Nội: Nxb Sử học.
- Trần Quốc Vượng – Vũ Tuấn Sán 1975. *Hà Nội nghìn xưa*, Hà Nội: Sở Văn hóa Thông tin Hà Nội.
- Ủy ban Nhân dân Thành phố Hà Nội 2009. *Kỷ yếu hội thảo khoa học 1000 năm vương triều Lý và kinh đô Thăng Long*. Hà Nội: Nxb Thế giới.
- Viện Khảo cổ học 2006. *Hoàng thành Thăng Long (Thăng Long Imperial Citadel)*, Hà

Nội: Nxb Văn hóa Thông tin.

Wolters, Oliver W. 1976. Lê Văn Hưu's Treatment of Lý Thần Tông's Reign (1127-1137), in Cowan, C.D. and O.W. Wolters (eds.). *Southeast Asian History and Historiography*. Ithaca: Cornell University Press, pp.203-226.

(文学研究科教授)

SUMMARY

A Spatial Analysis of Thang Long Capital during the Ly Period
through Re-exploitation of Written Sources

MOMOKI Shiro

Vietnamese government and people have just celebrated the 1000th anniversary of their Thang Long Capital or the capital of Ascending Dragon (present-day Hanoi) in October 2010. Thang Long Capital was inaugurated in 1010 with a single rectangular wall which had derived from the Dai La Citadel establishes in 866 by Chinese governor Cao Bien (Gao Pian). After that, however, walls were developed. Though the exact location of the walls and palaces are still to be identified, the entire capital area covered almost the same area as that of the Le Period, and it appears to have been divided into three spaces: (a) “Cam trung” (forbidden area) or “dai noi” (great interior area), which was narrower than Thang Long Capital in 1010, (b) “Thanh noi” (inside the wall), which seems to have originally meant the whole area surrounded by Thang Long Citadel wall in 1010, and (c) The suburban area outside the “thanh” or capital wall, where a irregular-shaped eathern wall (later colled Dai La wall) was erected in 1014.

Both (a) and (b) spaces appear to have been enlarged to the west by the beginning of the Tran Period (1225-1400) to cover respectively the similar area to the Forbidden Citadel and the Imperial Citadel of the Le dynasty. Yet, the exact places of Long Thanh (Dragon Citadel) and Phuong Thanh (Phoenix Citadel), both reportedly erected in the Ly Period, are atill unidentifiable. The plan of the palaces of Senior and Junior Emperors during the Tran Period are also unknown. For these reasons, it is difficult to compare directly the spatial composition of Thang Long in the Ly Period with that of the Le Period. More archeological findings are awaited.

キーワード：ベトナム，李朝，昇竜（タンロン）都城，空間構成，ホアン
ジェウ通り 18 番地遺跡